
年上の女と年下の男

小田原アキラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

年上の女と年下の男

【Zコード】

Z3857A

【作者名】

小田原アキラ

【あらすじ】

バレンタインデー直前に別れを告げられたアユは、酒に酔つて見知らぬ男と一緒に過ごす。数日後見知らぬ相手と会うことになり、アユはその男、一緒に振り回されるはめになる。年上が好みのアユが少しづつ一の魅力に惹かれていくお話です。

「わ、別れる？」

思わず聞き返してしまった。

「うん。好きなやつできたんだよね。この間のお見合いで一目惚れ。ていうか、俺もそろそろ身を固めないといけないからさ、いつまでも遊んでられないし、その人と結婚しようと思つてるんだよ」

それ、クリスマスの時にあたしにも言つてたよ。あたし結構本気にしてたのに。

「だから、今日で最後つてことにしてよ」

してよつて、お前何様だよ。しかも、よりによつてバレンタインデー前日だし。あたしが心を込めて作つたと思って買いだめといたチョコたちはどうするんだよ。あたしの気なんて知らずに呑気に笑いやがつて。どうせあたしはあんたにとつて遊びだったんでしょうね。

いろいろ突つ込んでやるかと思つたけど、最後の最後まで大人げない自分をさらけ出したくなくて、爽やかに笑つて彼の申し出を受け入れてやつた。最悪だ。

帰り際、優しく抱きしめられてちゅつとすると手を振つて別れた。もう一度と会わないだろうな。つていうかもう一度と会いたくないし。

社会人のおっさんなんかと付き合つんじゃなかつた。結局浮氣されて、別れるはめになるんだもんな。つていうかあたしつてバレンタインデー前にばつかり別れてる気がする。今の彼の前も社会人で、結婚してない人だと思つてたらバレンタインデー前に突然結婚することを暴露されて、不倫なんてごめんだから別れた。おかしいとは思つてた。クリスマスとか、お正月とか全然イベント時に限つて一緒にいてくれなかつたから。

あたしはいつでも本気だつたんだけどなあ。恋つて難しい。

さつきの彼も、あつさり別れたけど、本当に好きだつたんだよ。そつ思つと涙が出てきた。でも道ばただし、いろいろむかつくしで気が付いたら居酒屋に入つてた。しかもいつも行つてゐるところだ。店のおじさんの顔見たら滝のように涙が出て、周りのお客さんとか気にならず泣きまくつてた。

それで・・・本当にこんなこと初めてだ。お酒飲めるようになつてから一ヶ月なんだけど、絶対にすぐに酔うから飲まないようになりたのに、飲みまくつて記憶ぶつ飛んじゃつて、気が付いたら、ベットの上だ。

あきらかに、怪しい部屋だし。ドラマで見たことあるけど、本当マジでこういう部屋なんだ。初めて来た。確實にここ、ラブホだよね。布団から出て自分の体を見る。それから横を。案の定、全く知らない男がいた。悲鳴を上げかけた口を手で塞ぐと、急いで部屋を出た。

心臓がすごい音をたててる。もう、最悪。なんでこんなことになつてるんだよ。それから気付いたらお金払うの忘れていた。慌てて部屋に入つて、ラブホがいくらかかるのか分からぬから適当に三万だけ机に出して、出でいつた。

どうなつてんだ。もう、絶対お酒だけは飲まないよ。

数日後あたしの通う服飾の専門学校の友人たちば、あたしが別れた話を聞くと飲みにいこうと誘い出した。でも先日のこともあって、あたしは丁寧に断り、変わりに学校でジュースやらを持ってパーティー感覚の飲み会をした。それから、あたしが彼氏にあげようと思つてチョコの材料を買いだめしていたので、それで作ったお菓子を皆に配つた。男には義理チョコ。女にも義理チョコ。でも愛情たつぱりのつもり。

数を合わせてきたつもりだつたけど、一つだけ余つてしまつた。一つはあたしが自分で食べて、もう一つはどうしようかと悩んでたら皆がジャイケンで争奪しばじめたのではつとした。

「これで、このメンバーの中で付き合ってる人いなくなつたね」

ポテトを頬張りながら隣に座つたなつちゃんが言った。

「そうだな。でもこれはこれでいいんじゃね？　だつて俺らつてめ

ちゃ忙しいし。これからはもっと大変だろ？」

「そうだよね。今年は就職活動とかあるもんね」

十八の麻生と香織があたしのチヨコを食べながら言って、あたしに親指をたてたポーズを決めた。同時だつたので思わず吹き出してしまつた。

「二十歳かあ。なんか空しい・・・」

あたしが言うと周りに笑われた。あたしは一年浪人していた。大学を受験しようと思つていたけど、途中でよく考えると大学に行つてもやりたいことがないのに気付いて専門学校を受験した。受験といつても書類審査で、勉強はほとんどしなかつた。

でもこの学校に来て良かつた。楽しいし、仲間もできた。

学校を後にするとあたしはなつちゃんとレストランに入つた。一番仲のいい子なので、いっぱい話したいこともあつたし、その店はそういう時にも選んでいたところだつた。

「ねえ、入つたところなんだけど違うお店に行かない？　あたし田つけてる子いるんだ」

なつちゃんの色恋話はあたしの恋愛の数よりずっと多い。でも熱しやすく冷めやすい質なので、一回惚れしても付き合いつまでに発展することは少ない。

「いいよ」

それだけいふと、せつかく頼んだドリアを取り消してもらつて店を出た。

夜の道をどんどん進んで、明るい繁華街に入つていく。あたしは夜あんまり出歩かないからちょっと怖い。でもなつちゃんはすいすいと目的地まで足を運んでいくので、オドオドしていられなかつた。なつちゃんに連れてこられた場所はお洒落な雰囲気のバーだつた。お酒は飲まないと決意したばかりなので、入りづらかつたがなつち

やんに手を引つ張られて無理矢理店の中に入れられた。中は以外にも広く、スーツを着たり美人の女人の人人がたくさんいた。確実にあし一人場違いな気がして帰りたくなったけど、なっちゃんは興奮ぎみにさつさと席に座つた。

なっちゃんが狙つてゐる子はこここのウェイターらしい。数人が行つたり来たりしてゐるのを見るが、あれも違つ、これも違つ、と唸つてゐる。

「本当にいるの？ なんかさ、みんなカツコイイから同じ顔に見えるよね」

「そりかなあ。でも全然違うのよ。一目で分かるの」

そうなのか。でもあたし顔のいい人は苦手だな。なっちゃんは平気でカクテルを頼んだけどあたしは、ウーロン茶を頼んだ。バーに来てウーロン茶を注文するのは恥ずかしかつたけど、もう一度とあんな思いはしたくないので仕方ない。

「あ、いたいた！ ほら見てあそこ」

振り向くとちょうど今入りましたという感じで、カウンターの奥から男の子が出てきた。数人のウェイターと話をしながらカウンターに立ち、お客様と話をしてゐる。

確かに、顔つきはかなり男前。さっきまでカツコ良く見えてたウエイター達が色褪せていくようだ。まるでモデルだな。

「マジカツコイイ。見てよ、あの笑顔！ 紳士っぽいじゃない」

なっちゃんには悪いけど、あの手の顔つて相当ちやらい感じがする。結構遊んでるんだろうな。

「あたし声掛けてくるから待つてよ」

あたしを置き去りにしてなっちゃんはあつという間に、カウンターに行つてしまつた。一人にされてしまつと、よけいに店の雰囲気になじめない自分が空しい。一十歳にもなつてお酒も飲めないのかよ。という目で見られてる気さえする。

ため息を吐き出した瞬間、肩に手をおされた。なっちゃんだと思つて振り返ると、スーツ姿のみ知らぬ人がいた。その人が結婚を隠

してあたしと付き合っていた人だと氣付くまで少しだけ時間がかかつた。

「あ、三島さん！」

別れた時、一度と会わないと誓つた初めての男だ。

「偶然だね。こんなところで会つなんて。珍しいんじゃないの？」

あたしの肩から手をのけると、断りもせずになつちゃんが座つていたイスに腰掛けた。

「友達に連れてこられちゃつたんです」

「そなんだ。で、友達は？」

「あそこのカウンターに・・・？　あれ？　いない」

三島さんもわざわざ振り向いてなつちゃんがいないことを確認してくれた。でもその時に妙な笑顔を浮かべているのをあたしはしっかり見ていた。

すっと伸びてきた手はあたしの手を握りしめた。その瞬間に鳥肌が立つたのはもう既に好きじゃないからだろうな。

「ねえ、今晚ヒマ？」

「ごめんなさい。三島さんは、もう別れたじゃないですか。それに今日は友達も一緒なんです」

につこり笑つて穏便に済ませてやるつと、丁寧に断つたつもりだが、三島さんはうつとりとした笑顔を向けてくる。

「本当に友達はいるのかな？　一人できたんじゃないのか？」

「何いつてるんですか」

手を引ひきとすると、思ひつきり引つ張られた。顔が近付いていく。

「妻とは別れたんだよ。君さえ良かつたら、よりを戻さないか？
やつぱり、君じゃないと満足できないよ」

耳元に息を吹きかけるように話すので、余計に肌がぞわぞわする。三島さんってこんなに気持ち悪い人だつただろうか。あの頃は本気の気持ちだったから触れられるだけで赤面してたけど、こんなに気持ち悪いと感じるのはきっと、冷めてしまっているからだろうな。

今更寄りを戻そなにて虫のいい話、受け入れるはずない。

今度はあたしが思いつきり手を引いた。でもビクともしなかつた。

「ホント勘弁して下れー。あたしそんな氣まつたく無いですから」

「そうかな?」

「は? そうかなってどの口がいつてるんだよ。

「君つていつもそだつたじやない。嫌々いながら、結局受け入れてくれる。そうだろ?」

それは三島さんを好きだつたときの話だし。今は全然だめだつての。

いいかげん腕を振払いたくて殴り掛かるうかと思つた瞬間、別の声が入つた。

「すみません、お取り込み中申し訳ありませんが、そちらのお客さまのお連れ様が呼んでおりますので、『』案内させていただきたいのですが?」

ぱつと顔を上げてみるとなつちゃんが狙つてゐるといひ、イケ面男がいた。驚いたのは三島さんも一緒だつた。彼の顔や声には怒りが含まれていて、お客様に対する態度かよ。といづぐらい、恐ろしい顔をしていた。まさに鬼の面だね。

三島さんが気が弱い事をあたしは重々に知つてゐたので、これはラッキーだと思い手が緩んだところで身を引いてせつとウロイターの陰に隠れた。

「三島さん。本当に『』めんなさい。もつあたしそんな氣全然ないから

それだけ言つと、何も言わなくなつた三島さんをおいてウェイターの後についていった。振り向かなかつた。後ろから殴り掛けられたらどうしようかと思つたけど、しばらく進むと三島さんの姿は見えなくなつた。そこでようやく胸を撫で下ろせた。

「あんたさ、本当に『』じょうもない女だね」

突然言われて、はあ?と顔をあげた。

「別れた男だろ? あんなじょうもない男に引っかかつたり、酒飲

んで酔つてラブホに男連れ込んだりあ・・・。ホント、最低だね「男の日は、鋭く、あたしは数日前の出来事思い出しながら、嫌な予感を巡らせた。隣のイケ面の口振りからすると、あの日あたしと一緒にいたのつて・・・

「もしかして、あなた・・・あの日一緒にいた人？」

「はあ？　あんたが誘つて連れ込んだんだろ？　覚えてないのか？」

あたしは頬が赤くなるのを両手で押さえながら頷いた。深い深いため息が横から聞こえる。すっぽり恥ずかしい。そういうえば相手がいたんだよね。しかも置き去りにしていったし。

「そうだ、あの三万返すよ。普通割り勘だろ？　ラブホってそんなに高くなかったし」

そうなのか。相場が分からなかつたから、適当においてたんだよね。でもいらないや。そう言おうとしたら、彼が笑顔になつてある方向を指差した。その笑顔は視線の向こうに向けられている。

「ほら、お友達が待つてるぜ」

肩を小突かれて前を見るとなつちゃんが手を振つていた。あたしが慌てて手を振ると、ほつとした顔つきになつた。一番奥のカウンター。ここなら本当に三島さんお姿形、全然見えないや。

「じゃあ、十一時に俺あがるから、それまで待つてよ」

「は？　え、ちょっと！」

声を張り上げたけど、彼は聞く耳持たない状態で、さつさと行つてしまつた。なつちゃんの隣に行くと、思いきり抱きつかれた。

「よかつたあ。アコが絡まれてるのは見えたんだけど、あたしじや助けにいけなくてどうしようかと思つてたら、彼が行つてくれたんだよ。やっぱ紳士よね」

「・・・あの人、名前なんていつの？」

「齊藤一だつて。はじめくん。どうしたあ？　やっぱアコも惚れたのか？」

「違つつて」

「そうじやない。そうじやなくて、一夜を共にしたからには、名前

くらい知つといてやらないと失礼よね。大分怒つてたし。

ため息をつきながら、あたしはまたウーロン茶を注文した。なつ
ちゃんに、助けてもらつた時どうだつた？ とかいつぱい聞かれて
答えながら時間を気にしている自分が、すでに彼のペースに巻き込
まれていることにあたしは気付いていなかつた。

十時半になつちゃんは帰つてしまつた。ナンパだつたのだろうか、美人になつちゃんに一人の男が話しかけてきて、イケ面に相手にされなくなつたなつちゃんはその二人と盛り上がつた。それでそのままお持ち帰り状態で帰つちゃつた。

あの二人、見事にあたしのこと無視してたなあ。そりやあたし美人じやないし、ブスつてこともないと思うけど、目立つた顔ではない。でも化粧とかバツチシきめてるんだけど、そんなになつちゃんが魅力的だつたのかな。すつごい落ち込む。

深いため息をつくと、机の上に物が置かれる音がした。慌てて顔を上げるとイケ面の齊藤一がいた。机の上には水があいてある。わざわざ持つてきてくれたんだ。

「もうちょっとだから、待つてろよ。暇だつたら、あそこのかウントー来いよ」

「氣を使いつつも、なんかすつごい声が恐い。

「うん。そうさせて頂こうかな」

そろそろと立ち上がり、指差されたカウンターまで移動した。なんか落ち込んでる氣分の時に一の顔を見ると余計に自分が情けなく見えてくる。しかも一の目が鋭くて、責められてる氣分になつてくる。

カウンターには一ともう一人、イケ面ウェイターがいる。その人があたしが持つてきたウーロン茶と水のグラスを見るとやつと笑つた。馬鹿にされてるのが一目瞭然で腹が立つた。

「お客様、カクテルでも作りましょうか？ 僕うまいですよ」
この金髪キャラ男め。仕事中にいくつピアスつけてるんだよ。つけすぎだつての。いろいろ言つてやりたいけど、後々面倒くさそうだし睨み付けながら、あたしは断つた。
「じゃあ、ウーロン茶のおかわりは？」

まだ馬鹿にしたような笑顔をあたしに向ける。でもあたしは負けずに笑顔を作つて「いただきます」と言つてやつた。それからすぐウーロン茶をいただいたけど、素直に受け取る気分になれなかつた。

「お客さん怒つてる？」

「怒つてなんていません。それより失礼ですよ、あなたもある斎藤一とかいう人も」

「そりかな？ でも気付いてるんじゃないの。場違いだつてさ」力チンと来た。あたしがここに来てから氣にしてること、あつさり言いやがつて。もう帰りたい。

「そろそろあいつあがる頃だし、店の裏回つた方がいいよ」

あたしは勢い良く立ち上がつた。それからまた睨み付けて、店を出た。なんなんだあいつは。本当にこの店の人つて、お客様に対してのマナーが悪いよ。泣きたくなつてきたけど、あたしは急いで店の裏と思われるところに回つた。時間は十一時を回つたばかりだ。裏にはゴミとかが並んで、勝手口っぽいドアがあつた。そこまで行くと数人の男がタバコを吸つて立つてゐるのが見えた。行きづらい。と思っていたら、勝手口が開いて中からあたしを呼びつけたイケ面が出てきた。

あたしの姿に気付く前にタバコをふかしてゐる男一人に挨拶して、あたしの方に駆け寄つてきた。ウェイター姿と違つて、若さを感じるその姿にあたしは一瞬見惚れてしまった。

「これ、三万」

あたしの胸元に押し付けるように黄色の封筒を出した。あたしは落とさないよう受け取ると、中身を確認した。

「俺が払つとくからいいよ。女に払わしたくないし。それよりあの夜のこと、あんた覚えてないの？」

あの夜。あたしすごい酔つぱらつてたからなあ。

「覚えてない」

「だろうな。じゃあ、俺の名前も覚えてないんだろ？」

「さつき、なつちゃんに聞いたから分かるけど、齊藤一でしょ？」

「そうかあ。と言つて一は重いため息をついた。それからあたしの頭に手をのせた。そうされて改めて氣付いたけど、こいつ背が高い。あたしこれでも160以上の身長持つてるんだけど、180以上はありそうだ。

「じゃあ、あの夜のことどう思つてんの？」

言つとすぐに手を止めた。

「あなたに不快な思いさせたなんなら、謝りたいんだけど・・・初っ端からあたしに対して馬鹿にしてる感じだから、謝りたくないんだけど」

生意気なこと言つてるな。更に怒らせちゃつてるかもな。でも一は表情を変えずにあたしの方に手を出した。

「もういいや。携帯だして」

は？と思いつつ、あたしは自分の携帯を上着のポケットから出して差し出した。勢いに乗つたといふか、思わずといふか、やつてしまつたと気付いたら携帯を返された。

「何したの？」

「俺の携帯番号入れといたから、寂しくなつたら連絡してよ。むしろ俺からするかも」

なんていいながら、あたしの腕を握つた。今の言葉は、どうとやらいいんだろうか。混乱する。

「離してよ。あたし、あの夜のことほんといい思い出だつて思つとくから、これも返す。もう会わない方がいいよ」

思いきつて彼を突き飛ばした。それから封筒を投げ付けて、あたしは夜の街に飛び出していく。歩いてるんだけど、一は追いかけこなかつた。それがよかつた。なんだか、会つてはいけない気がしたから。好きになつてもいけない。

一緒にいると変になる。あの夜に記憶がすつとんびりしまつたのはお酒のせいだけじゃないのかもしない。あたしきつと重大なことを忘れてるんだ。そして彼はそれを覚えてる。思い出さない方がいい

い」となんだよ。そんな気がした。

携帯に入れられた番号は消した。もしかしたら掛かってくるかもしれないと思つてたけど、全然掛かってくる気配がなかつた。あれから数カ月が過ぎていつた。もう一もあたしとの夜を思い出にしているんだろうな。あたしのこと、早く忘れてそう。

もう一度と会わないと思つてたけど、次に出会つたのはあたしの専門学校帰りの電車の中だつた。あの顔を忘れるのは相当難しかつたみたいで、電車の中で一目見るだけですぐに分かつた。あっちもすぐに対しに気付いた。

睨み付けるような目であたしを見ながら、近付いてくる。近付いてくるほどにあたしは遠ざかつていつた。そうしているうちにいつの間にか一方がスピードがまして、腕をつかまれた。そのまま振り向いたら、あたしは驚いて声を上げそうになつた。

「な、なによあんた！ 高校生だつたの！」

騙されたようだ。こいつの姿、もう制服でそれがぴつたしくる。これつて本当に男子高校生つてことだよね。一は鋭い目つきをやめないまま口元を歪ませた。

「そりだけど。でも俺も気付かなかつたな。あんた高校生だと思つてたし」

高校生！ そんなに若くないですよ。むしろそんなに幼く見えるもんかな。あたしは立派な専門学生としてお洒落してるんだけど。最近の女子高生つて大人っぽいからな。

「失礼ね」

腕を振つて、繫がつた部分を断つた。電車の中で暴れるなんて恥ずかしい。そう思つて、空いてる席に腰を下ろした。

「久しぶりだな。つていうか俺ずっと連絡待つてたんだけど。なんで電話してくれないんだよ」

「しないよ。もう会いたくないつて言つてたでしょ」

「アコさんだつたよね？」

あれ？何で名前知ってるんだ？

「名前、教えてくれたじゃない。あの最低の夜に。俺、見かけこんなんだけ声掛けられたらほいほいラブホに行くような男じゃないし。あんただから行つたんだけど、昨日の男とかみてたら何かショックだつたな」

一の顔からは鋭い瞳がなくなつて、穏やかな顔つきになつてた。その顔を見ると顔が赤くなつていくのが感じられて、あたしは顔を押さえた。

「携帯かしてよ。今度は俺があんたの番号覚えるからね」

「え？ あたしの番号知ってるんじゃなかつたの？」

一は少しだけ頬を赤くしてふくれた。その顔を見て笑いながら携帯を差し出した。

「しりねえよ。だからあんたの事探してたんだけど、高校生だとおもつてたからさ」

なんか可愛い。年下だからついそう思つてしまつのだらうか。でもこいついう姿つて新鮮よね。あたし今まで社会人の人とかとばつかり付き合つてきてたから、年下の男の子とこいつやって一緒に話をしてるのは不思議な感じ。

返された携帯にはまた、一の番号を登録されてしまった。でももう消そとは思わなかつた。思い出さなければいい。あの夜のことは、忘れてしまえばいい。本当に嫌な予感がするから。

2（後書き）

二十歳の主人公の話です。私自身はそんな歳じゃないのですが、周りは二十歳が多いのでその人たちの経験をもとに作りさせていただいきます。

ここまで読んで下さってありがとうございます。早く更新できるようになります。

あれからあたしの携帯の受信履歴には、一の名前がほとんどを占めるようになった。でもまったく会うことはない。というのもあたしが学校に行く時間と、一が学校に行く時間が全く違うからだ。時々電車の中でバッタリ会ったりするけど、たいして話もせずに駅についてしまう。まあ無理してあたしの学校まで来たことがあつたけど、なつちゃんに可愛がられてて面白かったなあ。それに懲りたようで、会えなかつたりする日にはメールが来る。でも短くて単純なものばかりで日記みたいな感じだ。今日の出来事を伝えられてあたしがその感想を送つてやるだけ。これはこれであたしは楽しんでるかもしない。

昼間は高校に行つて、夜はバーで働く。バーなんて未成年は働けないはずだ。そう不思議に思つてそれを訪ねてみると、知り合いに頼んで働かせてもらつてるらしい。しかも一人暮らしだったので聞いた。あたしと一緒にいる。でも、あたしはぶつちやけお嬢だから、仕送りで生活してるんだけど、一は働いて稼いだ金で生活してるんらしい。勤労高校生なんて苦労が多そうでかわいそうだ。

そんな話をしてやつたら、一は調子に乗つてあたしの手料理が食べたいって言い出した。以前に料理が趣味とかいう話をしたのを覚えてるんだろうけど、あたしは人を家に上げるのがあまり好きじやなかつた。断るうと思つたんだけど、所持金が一万も無いという話を聞くと作つてやるしかないかなつと妥協した。

二人になるのが嫌だつたのでなつちゃんも誘つた。最近気付きはじめたけど、あたしと一の関係つて微妙なんだ。つていうか変。恋人同士みたいに、毎日連絡取り合つてる。でもどっちも何もいわない。ぶつちやけ気持ち悪いけど、あたしは今みたいな関係は嫌じやない。だって、あたしの一言一言に素直に驚いたり笑つたり怒つたりする顔を見れるのは、新鮮の反応だと思うから。恋人同士になる

なんて、考えられないな。だつてあたし恋人というよりは一のこと
を弟ぐらいにしか見れてないんだよね。玩具みたいに遊べる弟。だ
から「」のままがいいと思つ。

「より早く来たなつちゃんはあたしに牛肉を差し出してくれた。
おかげでメニューが豪華なすき焼きになつたので一が喜ぶだろうな、
と話をしていると玄関のチャイムが鳴つた。

「はーい」

多分一だ。玄関のドアを開けるとやつぱり一がいた。制服から着
替えた姿で、急いできたのか頬が赤く染まつていた。それから後ろ
にはバーで働く一の先輩の、阿部さん。あたしに馬鹿にした笑顔を
浮かべてきた人だ。あたしと一が携帯で連絡を取り合つようになつ
てから何度もバーに足を運んだおかげで仲良くなつたけど、今でも
あたしはこの人が苦手だ。

「どうぞ、あがつてください」

良き家の主としてスリッパを並べてやる。でもあたしの住んでる
部屋はたいして広くないからすぐ脱いぢやうんだけど。すでに準備
が出来上がつていて、一と阿部さんが持つてきたお酒を机に並べる
となつちゃんとが机の上にすき焼きの具がたつぶり入つた鍋を持つて
きた。

「うますー。肉料理なんてめつちや久しぶり。」「ぶさたしてます」
なぜか手を合わせてすき焼きに拌む今年高校一年生、受験街道ま
つしぐらなーは一人せつと卵を割つて肉をとろうとした。そこを
あたしの手刀が飛んでいつて一は小さく悲鳴を上げた。

「みんなで合唱してから」

そういうと阿部さんがグラグラ笑つた。つられるように吹き出し
たなつちゃんを見ながら、急に恥ずかしくなつて俯きながら席に着
いた。

いただきます。と言いながら既に肉をつかんでいた一を睨んでい
たけど、美味しそうに食べている姿を見ると頬が緩んだ。

「マジうまい！ アコさん自分で料理上手っていうだけあるね」

「そりかなー。肉ならたっぷりあるからジャンジャン食いなさいよ」
バシッと背中をたたいてやると一は咳き込んでしまった。

「でも意外だなあ」

阿部さんの言葉にあたしは頬を吊りつられそうになりながら笑つた。

「あんたってトロいうのに料理うまいんだね。奈津実ちゃんもう思うでしょ」

なつちゃんは今口の中に含んだ肉をちぎるのに必死で話を聞いていなかつたらしく、あたしと阿部さんを不思議そうな顔をしてみていた。なんか会話にオチがないって気まずい。

なんだかんだけで盛り上がつたことは盛り上がつた食事会は、酒に手を付けはじめたなつちゃんと阿部さんの勢いによつて夜遅くまで続いた。なつちゃんは初めからあたしの家に泊まるつもりだったので酔つぱらうだけ酔つぱらつてあたしに片づけを押し付けた。阿部さんも初めから一に送つてもらつ氣だつたらしく、なつちゃんと張り合つようになつぱらつていた。

あたしはもちろん、嫌な思い出のある一は一缶飲み終えるともつやめてしまつた。なので片づけはあたしと一がすることになつた。

「明日学校だよね？ こんなに遅くなつて、朝起きられるの？」

勤労高校生の遅刻を心配して聞いた見たけど一はにっこりとした笑顔で、大丈夫と言つた。バイトでなれてるらしい。

「あんまり無理すんなよ。ホント、苦労してるよね。なんで一人暮らしなんてしてんのよ。高一でしょ？ まだまだ遊びたい盛りじゃん」

「

洗つたお皿を渡しながらそつと顔を覗き込んでやつた。

「俺だつて遊んでるよ。それに今のバイトめちゃ楽しいし、苦労してるなんて思つてないよ」

慣れた手つきでお皿を拭いていく。

「食器乾燥機かつたら？ 金持ちなんでしょう？」

「そりだね。あんまり家で食事することなかつたからタイミングの
がしてたんだ。思いきつて買おうかな」

「そしたらまた食べにくるよ」

「そうきたか。一はでかい鍋も雫を床にこぼすことなく拭き取つて
いく。洗い終わつたお皿を食器棚に入れながら酒で酔つぱらつてそ
のまま寝てしまつた二人を眺めると、思わずため息が漏れた。さて、
どうするか。

「うわ、阿部さんマジ爆睡じゃん」

いつの間にか背後に立つていた一が耳元で声を上げた。

「坦いで帰れんの?」

みるみる表情が変わつて、自信なさげな顔にかわつた。阿部さん
も大の男。起こせばどうにかなりそうだけど、一とは家が正反対の
家にあるとかで送つていくには重すぎるだろ?。

「自信ないけど、置いてくわけにいかねえし」

「いいよ。泊まらせてあげる。だからあんたはそろそろ帰んなさい」
「待つて、待つて。阿部さん泊めるんなら、俺も泊めてもらつても
いい?」

なぜそつなる。あたしは慌てて首を振つた。

「駄目駄目! 阿部さんはほら、酔つぱらつてるから仕方ないのよ。
そこまで送るし、そろそろね?」

追い出すような言い方だ。傷付いたような顔をして一はあたしを
凝視した。どうしても一人になるのは避けたかった。一があたしを
瞳に映すときの表情が、会う度に変わっていくのを知つていてから。
「わかった」

意外にも素直に返事が返つてきたのであたしも外に出る支度をし
た。といつても上着を羽織るだけなんだけど。

外は寒い。でも春に近付いているのが分かる。三月にはいつたん
だな。一と出会いからすでに一ヶ月以上が経つてゐる。今までずつ
と年上ばかりと遊んでたあたしが、弟みたいな一と出会えたのは
どうしてなんだろう。最悪の出会いの中で、あたしが忘れてしまつ

た記憶を一はあたしに教えてくれない。思い出すのを待ってるみたい。でもあたしは思い出したくない。

アパートから十分程度の駅まで行くといつたけど、一は夜は危ないからと断った。アパートの下までいくと一が立ち止まった。

「マジな話さ、次はいつ会える?」

真面目な顔をするもんだからあたしはすぐに返事ができなかつた。そしたら一は顔をうつむかせてあたしの手を握つた。

「アコさんは、俺のこと迷惑がつてる?」

不安そうな声。

「全然。そんなこと思つてないよ。急にどうした? 悩みもあるの?」

「悩みなんであるのか? いつもやつて甘えてくるのを知つたのは、連絡を取り合つようになつて初めて会つよくなつた時からだ。それまでは、顔はいいし、頭はそれなりにいい学校いつてるからいいと思うし、体力あるし、筋肉はしつかりついてるし、モデルみたいなスタイルだし。きっとモテると思っていた。今もモテる。それにいつも楽しそうで、悩みなんてなさそうなの!」

「悩み・・・悩みはあるけど、言えない。でも迷惑じやないなら、会つてくれる?」

「いいよ。こいつでも。また、メールしてよ

「分かつた。じゃあおやすみ」

一は握つていた手を引いてあたしのおでこにさりとキスをした。それからさつと歩き出して手を振つた。あたしは何が起きたのか理解できなまま手を振つていた。

瞳に映る一の姿は弟という位置にしかないんだけど、一にとつてあたしは恋愛の対象のようだ。そう確信できる、キスだった。

あたしの家を知つてから、一はメールもせずにあたしの帰りを待つていることが多くなつた。どうしてあんなに寒い中で待つてるんだ？と聞くと、おいしいご飯が食べたかったから。だと言うもんで、あたしは思わず吹き出してしまつた。

初めは週に一回程度に食べに来ていた一は、バイトのない日だけここでご飯食べに来る気じゃないかと思うぐらい、頻繁に顔を見せようになつた。そして必ず晩飯を食べて、十一時には帰つていぐ。電車の時間があるので慌てて出ていくときもある。泊めてやつてもいいんだけど、あきらかにあたしに恋愛感情を抱く一を泊めるのは貞操の危機を感じるのであたしからは言えない。

近頃は専門学校の課題に追われ、学校に遅くまでの残ることが多くなつた。あたし以外にもいっぱい友達が残つてゐるんだけど、同じ方向のなつちゃんは早いうちに終わらせて、暗い道を怯えながら帰る日々が増えた。そういう時は、一が家の前で待つていよいように、先にメールを入れて家に来ないよう忠告しておく。

そんな春に近い夜のことだつた。その日も夜遅くまで残り、友達と別れて帰つっていた途中で後ろから迫る足音が聞こえた。近付いてくる足音はそのまま通り過ぎると思つていたら、一定の距離を保つたまま、あたしの後をついてきた。怖くなつて振り返ることもせずに、駅からの長い道を歩いた。徐々に早歩きになり、足音が近付いてくるとあたしは走り出した。

街頭の明かりは弱々しいもので、アパートまでの近道を選んでしまつとそこはほぼ真っ暗な状態だ。しかも民家なんてなくて、閉まつた店が並んでる。アパートまで後少しなのに。走りだしたはいいけど、後ろの足音も走り出して追いかけっこになつてしまつた。どうしてあたしの後を追つてるんだろう。でもこの時そんなことは考えられない。叫んでも誰も来てくれない。

足音の人の手があたしの肩をつかんだ。そのまま道に倒される。叫んで、蹴つたり叩いたりするけど、男の人っぽい手で押さえ込まれる。

もう駄目だ、犯される！

目をつむつてから男の手が動かなくなつた。それから低いめき声が聞こえて、目を開けると一がいた。驚いた。でもほつとした。一がすごい勢いで男に殴り掛かつて、男が低い呻き声を上げた。それから男が反撃し、それが見事に一の顎下に入つて倒れてしまふと、逃げ出した。

「はじめ！」

慌てて震える足を立ち上がらせて一に駆け寄つた。頭をゆっくりと起こしながら殴られたところに手を触れる。うめき声を上げて、ゆっくり目を開けた。

「大丈夫？」

開口一番にそれを言われて、力一杯頷いた。それから涙が出そうになつたので、抱きしめた。

「アユさんが無事で良かつた」

手があたしの髪に触れる。その手を握つて、笑つた顔を向けると「ありがとう」といつて涙を流してしまつた。

「なんで、なんで、ここにいるの？」

「今日も寄らせてもらおうと思つてたんだ。時間が同じでよかつた。手、震えてる。怖かった？」

怖かつた。でもこの時に一があたしのアパートに来ようとしてくれていたことに、とても感謝している。道の真ん中で、一に抱きしめられながら涙を流した。ずっとあたしの頭をなでて落ち着かせてくれた一は、弟ではなかつた。ここがあたしの気持ちの切り替わった瞬間だつたと思う。

その日から、なるべく帰りが遅くなるときは一に送つてもらうか、タクシーを使うようにした。もう一度と怖い思いはしたくなかったから。時にはなつちゃんが車で送つてくれることもあつた。あたし

にも車の免許を取るように勧めるので、仕送りで貯めたお金が溜まつたらしようかな。

春を迎えて、あたしは一年生になり、一は受験がはじまる高校二年になった。年が縮まつたけど、またすぐに離れていく。たいしたことのない年の差。だけど気にしてしまうのは、あたしが徐々に一に惹かれ始めてるのかもしない。

課題が終わつて学校が短縮になる日、入り口のところに学生服が見えた。よく見ると、一が突つ立つていた。駆け寄る途中であたしに気が付き、一が手を振つた。

「どうしたの？ 学校は？」

「今日から毎まで。アユさん、これから用事ある？」
「ないよ」

一はポケットから一枚のチケットを取り出した。それは近くにある遊園地のチケット。

「友達がスーパーの懸賞に当たつたんだ。行かない？ 今日までなんだけど」

遊園地なんて一年ぶりだ。高校の卒業旅行に行つたきり、行つてない。

「行く！」

「じゃあ、早く行こう」

自然と一の手があたしの手と重なつて、引っ張られる。後ろの方から、友達の声が聞こえたけど、振り返ることもせずに走り出した。スカートにパンプスを履いてきたから、走りにくいけど時々後ろを気にする一の笑顔を見ると、嬉しくなつてしまつ。

駅に着き、四つの駅を乗り過ごすと、観覧車が見えてきた。小さな遊園地。服飾の専門学校に通いはじめ、一人暮らしをはじめる頃から、一度は行ってみたいと思っていたけど、行く機会を逃してばかりいた。でも今日ようやく行くことができて良かつた。

「俺、ここ遊園地初めてなんだよね」

電車から降りて、改札口を出ると一が言つた。歩いて二十分。バスなら十分程度。

「あたしも。一つて、この辺の人じゃないんだ。あたしも、違うんだけどね」

バスの時刻表を覗き込む。

「今時間、全然バスないや。歩いて行こつか

頷いて、歩きはじめる。観覧車がビルに見え隠れするけど、見る場所を探しながら歩いた。

「俺は海に近いところにすんでたんだ。実家はまだそこにあるんだけど、俺は追い出されちゃてるから戻れないんだよね。バーのバイクは親戚の人の紹介なんだ。親戚の人と俺の両親仲悪いから、俺に協力してくれて・・・つてこんな事今話すことじゃねえよな」

ははっと笑い合つてすぐに見上げると、観覧車はすぐ目の前に迫っていた。小さくて、広くはない遊園地だ。でも幼い頃に来たことのある遊園地と似ていた。

中に入つてみると乗り物の少なさと、人の少なさが目立つた。短くて迫力のなさそなジェットコースターに急いで乗り込むと、他に乗る人がいなくて一番前に乗ることになった。

「うつわー！ ドキドキするなあ」

一はそう言いながら、頬を紅潮させて興奮気味だった。それはあたしも一緒で、絶叫系の乗り物が大好きなので早く発進して欲しかった。でもいざ動き出すと、体が浮いていく感じが気持ち悪くて、降りてすぐにトイレに駆け込むはめになつた。

戻つてくるとベンチに一が座つていて、あたしを見て慌てて駆け寄つてきた。

「大丈夫？ そんなに早くなかつたと思つけど

「早さの問題じゃなくて、久しぶりで気分悪くなつただけ」

手で一の肩をおした。心配させて悪かつたけど、あんまり近付かれたくなかつた。

「じゃあ、メリーランドは？ よけいしんどい？」

メリーポーランドなんて、卒業旅行でも乗つてなかつたな。

「いいね。乗る?」

やつぱり誰も乗つていないメリーポーランド。あたしと一は隣同士の馬に乗つた。でもこれつて動いているうちに離れていくんだよね。そう思ひながら乗つてみる。

「うわあ、こんなちつちやい頃以来だよ。変な感じ。それにしても馬かたいなあ」

べしひ叩くと、空洞から聞こえる低い音がした。

「確かに。こんなに堅いと尻痛くなりそうだな」

「そうだろうね。

動き出したメリーポーランドは案の定、あたしと一の距離を離していった。前を行く一は楽しそうに叫びながら、時々あたしの方を振り向いた。あたしは笑つてみせたけど、距離はなんだか悲しいほど、溝のように深まつていく気がして泣きそうになつた。

今があたしと一の距離は、まだまだ遠い。

外が真っ暗になりかけた頃、一は急にあたしの手を引っ張つて恋人たちの定番ともいえる、観覧車にのせられた。観覧車は高く、綺麗に光つているし外の景色はとても素敵なものが見れるよつな予感がした。

「どこまで上がるかな?」

「さあね」

一が言つてすぐ窓の外を見た。夜の観覧車は初めてだ。なんだか動悸が激しくなつていくのを感じる。

「飛行機から見る光つて見たことある? それぐらい、綺麗に見えるのかな」

「宝石みたいに見えるやつ?」

「そりそり。町のネオンつてお金の無駄だと思つてたけど、こういう時代だからこそ、綺麗に映るんだよね」

ふーん。とだけ言って関心なさそうにまた窓の外を見た。一はな

んだか緊張してるように見える。あたしと一人でいるからだとしたら、ちょっと笑えるな。

高いところまできたけど、残念なことに飛行機から見る景色ほど美しくは映らなかつた。思わずため息を吐くと一が笑つた。そんなおかしなことしたかなあ？と思つていると、一は観覧車を揺らしながらあたしの隣に座つてきた。おかげで、観覧車が傾いて、あたしは叫んでしまつた。

「待つて！ 動くなら、動くつていつてよ！ これ一応バランスとつてるんだから！」

「ごめん、ごめん。ね、俺からの一大決心聞いてくれる？」

一大決心？ 気になるな。耳を寄せるようにいわれたので、顔を近付ける。すると一の手があたしの髪の毛に触れて引っ張られると頬にキスされた。驚いて身を引くと、真剣なまなざしがあつた。

「アユさんのこと好きなんだ」

は？ と思つたけど言えなかつた。ついに、ついに言われてしまつたな。という感じだつた。でもすぐに返事できなかつた。あたしが持つ気持ちは、まだまだハツキリしないものだから今い返事しても中途半端なものになつてしまつ。言葉が詰まつて、出て来れない。そういうふう思っているうちに、観覧車は一周していた。

「降りようか」

その声も顔も、笑つていたけどひとつ期待してゐるんだと思つた。

返事をどうしようかと思つて、一と念つてがなかつた。それでホツとしていたんだが、やつぱり返事をしなければいけない日はくる。だから必死に考へるけど、何言つたらいいのか分からなくなつてきて、面倒になつて、なつちゃんに打ち明けたら一緒に何故か飲み屋にいく話になつて、いた。

飲み屋はいつものこと。飲酒は禁じていたが、ここで思いきつて解禁してみると。苦い思い出のある飲み屋だけど、ある意味思ひ出の場所だ。ついでにその話をなつちゃんにしていなかつたと氣付いたが、今更な気がして言えない。

「うわあ。飲みにいくなんて久しぶりー。じゃんじゃん飲んじゃいます」

「ジョッキ片手になつちゃんと乾杯をする。」うつのも久しぶり。なんのお祝いでもないのにテンション上がり、ジョッキをぶつけまくちゃうんだよね。

「あんた付き合ひ悪かつたもんね。飲み屋ついてくるけど、ウーロン茶、ジースばつかでさ。お前は子供かって感じだつたなあ」

「そのせつは、どうもすみません」

「いえいえ。で、返事の件だけど・・・一君焦つてないと思つてしまつくり考えたらいいと思つよ」

「うだらうなあ。あたしも分かつてゐんですよ。一があたしの返事を急かしてくるんじゃないことも、時間いつぱい使って真剣に気持ちを考えることも。

「おじさん、きんぴらがめつてた。あと、焼酎!」

なつちゃんがカウンターからおじさんに声をかける。おじさんはニツコリ笑つて返事をした。ついでに「一と一夜を過ごしてしまつた夜もこのおじさんにお会つてたんだよね。

おじさんはきんぴらと焼酎を出すと、あたしの方をじっと見た。

首を傾げてあたしもおじさんを見ていると、「あー」と声を出した。

「あんた随分前に酔っぱらつてった女の子だね？」

隣のなっちゃんは驚いた顔をしてあたしを見ている。赤くなりながら、顔をうつむかせた。

「そうです・・・。あの時は、『迷惑おかげしました』

「いやいや、あんたも大変だつたんだねえ。ずっと彼氏の話ばつかりして、どうにも忘れられなかつたんだよなあ。あのにいちゃんは元氣かい？」

「にいちゃん？誰のこと？」

「あの、にいちゃんつて？」

「あの日、一緒に喋つてたよ。あんたと一人で酒飲みながらね。そのまま二人で店出でいつたから、知り合いかなんかだと思つてたんだけどねえ」

それだけ言つとおじさんは常連のお客の来店の挨拶をし、席を案内していく。なっちゃんと田を合わせると、何の話？と首を傾げられた。「なんでもない」わけなかつたけど、誰かに打ち明けるような話じやないと思つた。結局、なっちゃんも追求しなかつた。気にはしてたみたいだけど。

それよりも、あの日のことを、おじさんは覚えてた。しかも知り合いみたいに喋つてたつてことは、あたしが一を引っ掛けたわけじゃないのよね。多分そういうことになると想つ。

だんだんと思い出してきた。あの夜のこと。

あたしがおっちゃんと喋つてたら、一がきたんだ。一は誰かと飲んでたようだつたけど、あたしの隣にわざわざ座つて話をしたんだ。その話は、ほとんどがあたしの愚痴。彼氏の悪口とか、いい事ないなあとか。そんな話を一は黙つて聞いていた。それからもう一件別の所行こうつて、あたしが誘い出して、確かにもう一件行つた。その後、記憶が曖昧になつてきたけど、本当に酔っぱらつてラブホに入つた。

その後のこと、思い出してしまつと頭がパニックになりそうだ。

なっちゃんと話をしてるのに、お酒も飲んでるのに、何も感じ取れなくなつた。笑つてゐる顔も、筋肉が勝手に動いてるだけで感情は動いてないようだ。

居酒屋を出て、一人で駅まで歩きながら考えた。
あの夜、ベットの上で一はあたしに言つていたんだ。観覧車の告白より、ずっと熱い言葉を口にしてたんだ。

『俺、まだ子供であんたを幸せにすることとか、約束できないけど、笑わせることはできると思うんだ。今見たいに、無理に笑つてるんじゃないで、楽しんでるつて顔させてあげられる。だから俺といろいろ持ちに気付いたら駄目だと思ってたんだ。

観覧車での告白のときの複雑な気持ちも、きつとじこにあつたんだね。

それで、あたしは頷いてたね。だつて何いつてのかほとんど頭の中に入つてなかつたんだもん。それでも、気付くのは遅くなつたけど好きだつたんだよね。好きだから、頷いてたし、今までこの気持ちに気付いたら駄目だと思ってたんだ。

店を出て、駅に向かおうとしていた足は自然と一のバイト先のバーへと向かつっていた。自然な行動だと思つた。もつと前に気付けば、こんなにウジウジしなくて良かつたのに。と思うけど、気付いてしまつたら、何かが壊れる気がしていた。

以前なっちゃんに何度も言われた言葉がある。あたしが求めてい
る父親の面影は、今まで付き合つてきたスーツ姿の人たちに重ねて
いるんだろうつて。そうだつたかもしれない。でも必ず愛はあつた。
あたしからも相手からも、愛はあつたはずだ。それでも短期間であ
つさり振られてしまうのは、あたしの瞳はスーツ姿の上に父親を浮
かべているからだと思つ。それつていけないことだし、傷付いちや
うこともあるんだろうね。あたしはなっちゃんに何度父親と重ねて
見ていくと、忠告されても聞き流していたけど、一と過ごした時間

はそういうものを打ち消していた。

甘えることが当たり前のようだつたけど、一といるときは自分が引っ張つていけないと思うところもあった。でもそういう場面であたしはいつも、父親というものからはなれていく自分が恐ろしかった。あの優しかった父はもういない。いなくなつてしまつてから、随分時間が経つて、母はふつきれて妹と暮らしているのに、自分が捕われたまま。でも忘れちゃいけない。父親のぬくもりを忘れたくなかつた。だから、ずっとと思い出せずにいたんだと思う。

いっぱい考えてたけど、結局弱い心を持つてたつてことなんだよね。今は、自分に正直になる。

バーはいつものように賑やかで華やかだ。女の人はおしゃれな格好で席に座つて男たちに声をかけてる。あたしにはとても場違いな場所。でもバー カウンターでカクテルを作りながら客と話をしている阿部さんを見つけると、小走りで駆け寄つて、カウンターに座つた。

阿部さんはお客様にカクテルを渡すと、あたしの方を見た。
「珍しいじゃん。一、呼んでこようか？ 飛んでやってくると思つけど」

阿部さんは既に知つてゐるらしい。あたしは頬を押さえながら首を振つた。すると阿部さんは大きなため息をはいて、あたしに耳を寄せるように手招きした。

「なに？」

「返事に困つてんだろ？ 僕は一の奴、やめといた方がいいと思うけどな」

そういうとあたしは阿部さんから少し離れて、睨むように阿部さんを見た。

「どういふこと？」

阿部さんはカクテル表を出した。せつかくだから何か作りながら話そつといふことだつた。あたしちょつとお酒臭かつたかな。あたしは適当に選んだけど、阿部さんはにっこり笑つて手際良くカクテ

ルを作りはじめた。

「あいつ、彼女いるんだよ」

「あ？ と言つていろだつたが、阿部さんは続けた。

「もう三年以上つきあつてると思ひよ。でも別れたりくつついたり。今もそうだな。別れるわけじゃないが、会つたりしてにだらうな。あいつこういう時期はいつもそつなんだよ。彼女とうまくいかない時について、他の女と浮氣するんだよ。あんたも、そうだよ。結局、彼女とより戻したら浮氣の相手は一が振るんだ。今、もししいい方向に話が進もうとしてるんなら、やめといた方がいい。後で泣くのはあんただからな」

出来上がつたカクテルは、赤い色をしていた。でもせつかく暖まつた心はこのカクテルのような色はしていなかつた。真っ青に、染まつてしまい、悲しみの色をあらわしていると思つ。

ショック。そうショックだ

「あいつのあんたに対する気持ちは本物だけど、彼女はもつと大切なはずだ。あいつ母親を重ねて見てるんだ。面影とか、一つ一つの仕草が似てるんだつて話してたことあつた。母親に捨てられたあいつにとって、彼女は重要な存在で、離れられないんだ。それは彼女の方も一緒でさ。だから、あいつは無意識に寂しさをうめるために女を求めてるだけ。本気になる前に、やめたほうがいい」

そうか、一もあたしと一緒になんだ。でも違うのは、あたしは一の恋愛対象ではなく、母親の面影に過ぎないこと。じゃあ、好きだつて気付いても無駄なんだね。

カクテルを一気に飲み干した。阿部さんは、黙つてあたしのに見つぶり感心しながら、瞳は優しそうに、見守るようにあたしを見ていた。

結局、あたしは一に余わずに帰つていった。

家に帰つてすぐメールが入つた。一だ。この時間は丁度バイトがあがつた時間だろう。たぶん阿部さんからあたしがバイト先に行つたことを聞いて、連絡してくれたんだろうけど、メールを開ける気分にもなれず、あたしはベットに倒れ込んだ。

ショック。そして悲しくて寂しい。せつか手に入れた気持ちだつたけど、手放すしかないなんて悲しすぎる。こんなとき泣けたらいいんだけど、うまく涙も出てこなくてモヤモヤとした気持ちばっかりが気持ちを覆いつ。まるで雲のようだ。

しばらく布団にくるまつていると、チャイムを鳴らす音が聞こえた。携帯の時計を見ると一時を回っていた。考え方をしていたつもりが、いつの間にか寝てしまつていたらしい。それにしてもこの時間に人が訪ねてくるのはおかしい。

ドアのところに音もなく近付く。リズム良くなられるチャイム。うるさいと思いながら、近付き外をのぞくと案の定、一が外に立つていた。思わず漏れたため息。チヨーンを外さずにドアに隙間を開けながら一に声をかけた。

「近所迷惑・・・」

声のトーンがあたしがどんな気持ちでいるのかくらい分かるだろうな。そう思いながらいつてやつたけど、一はドアを外す気かと思うくらいの力で持つて、あたしの顔を覗き込んできた。

「よかつた！ メールかえつてこないから、もう口きいてもらえないかと思つた」

できることならどうしたかつたんだけどね。

「遅くなつたけど、告白の返事するね。あたし、やっぱ！」

と言いかけたとき、慌てるようにして一があたしの口を押さえた。

「まずは、俺の話聞いてよ。阿部さんがアコさんに俺の彼女のこと話たんでしょう？」

じつと田を見つめて、うなずいた。

「彼女いるんでしょ？ それは認めるんだね。それだけでさ、分からじやん。あたしに言つた告白なんて、本物じゃないんだって。本物じゃないものなんていらないもん。あたしは、浮気につきあう気にはなれない」

「は一瞬困った顔をしてから、頭をかいて俯いた。それから長いため息の後に、あたしの方を向き直つた。

「彼女はいる。でももう付き合つてゐるのか分かんないんだよ。いつもそななんだ。喧嘩したわけでもないのに急に連絡とれなくなつて、会いにいこうとしてもあいつ拒否つてるからどこにもいないんだ。そういう状況でさ、優しい人とか、アコさんみたいに惹かれてしまう人に出会つたら好きにならずにいられない。初めは、一番はじめは本当に別れてたと思つてた。でもあいつは俺が他の女とつきあいはじめたつて聞くとすぐに、戻つてくる。そこで俺はいつも混乱するんだよ。どっちをとるとか、どっちが好きなのか、どっちと一緒にいたいのか。結局、選ぶのいつも彼女だよ。彼女は、俺を無理矢理にでも犯してしまふから、俺は拒めない」「

今度はあたしがため息をついた。

「言い訳よそんなの。今まで、振つてきた女の子の気持ちを代弁してあんのことなんかけちょうけちんに貶してやりたいね。最低だよ。気持ちを利用して、自分だけ良かつたらどうでもいいなんて。あたしはそんな女の子たちと一緒にになりたくない」

「今度は、アコさんへの気持ちは今までと違うんだよ。本気だし、離れたくない。今までの関係を崩すようなことしたくないし、先にも進みたい」

信じられない。どれもこれも、いい様に言葉をかえているようにしか聞こえない。捻くれているんじゃないんだ。はじめの気持ちを信用するモノがない。

「・・・彼女の名前、なんて言つの？」

「は驚いた顔をしたけど、すぐに真顔になつた。

「・・・あゆみ」

今度はあたしが驚いた。よりによつて同じ名前かよ。きつと美人ですつごく、優しい人なんだろうな。

「今晚はかえつてよ。一はさ、きつとあゆみさんが傍にいなくて寂しいだけ。自分で中で答えは出てるよ。だから今日は帰つて」

そう言つてドアを閉めようと手を動かした。でも力強い腕につかまれて、思つようになつたまま、引き寄せられた。ドアの小さな隙間に一が顔を出す。そうするとあたしの肩口に当たつて、くすぐつた。耳元に唇を寄せられて、あたしは何度も愛の言葉を耳にした。

仕方のないことだつた。あたしは少し前にすきと気付いたばかりで、冷めるには遅すぎたし、恋の始まりつてやつは、その気持ちを盛り上げてしまうものだ。あたしにさせやかれた言葉たちを、信じてしまいそうになる効力はあるのだ。

あたしはチーンを開けて、一を中心に入れた。それがどういづこと意味してゐるか分かつていて。期待だけはしないように言つたけど、一とあたしはベットの中に入つてしまつた。

だらしない女だ。いつもそう。流されてしまう。お酒も飲んでたし、いい気分だった。そういうのが積み重なつたとで後悔するのは自分なのに、なかなか反省しきれていない。

一の寝顔を見ながら、あたしはあゆみさんの事ばかり考えていた。会つてみたい。そして、その後は・・・

「こんにちわ」

そう声をかけてみると、首を傾げるようにしながら笑顔を向けてくる美しい女性。ピッタリな花屋という職場。クルクルのパーマでフンワリと可愛らしい髪型をしているのに、背丈と顔のきりつとした眉が美人という印象を与える。

一と並ぶと美男美女のようだと、思わず考えてしまった。

あたしの目の前にいる美女、それはあゆみさんだ。その彼女と出会うまでは、阿部さんの協力があった。

なりゆきで寝てしまった朝、先に起きたのは一だったようだ。始発に乗れるように急いで家を出たらしい。玄関の靴が散らかっている。今日は学校はないし、特に用事はなかつたが時計の針は八時を指していたので驚いた。せっかく朝早く起きたので、あたしは部屋の掃除をはじめて玄関に散らかった靴を片付けた。それから一息ついて朝食を食べると、携帯をいじりながらずつと考えていた。

どんな顔をしているんだろう。どんな声なんだろう。あたしとは違つて、背も高いんだろうか。それともとっても可愛い、守つてあげたくなるような人だろうか。ずっと考へてる。あゆみさんという人のことを。あたしは、その人の彼氏である、一と寝てしまったのに。

気になるという感情は、嫉妬とかそういうのじゃない。一が好きになつた人が、どうして一と一緒にいられなくなつてしまつたのに、付き合つていてるといえるがどうしてなのか不思議なのだ。

ため息が漏れた。苦手のブラックのコーヒーを飲みながら目を覚まさせて、あたしは意を決して阿部さんにメールした。今は寝ている時間かもしれない。すぐに返つてこないだろつと思つたが、意外にもすぐに返事は来了。

あたしが送ったメールの内容は、亜由美さんについて教えてほしいということ。阿部さんは場所を指定して、あたしの家の近くにある喫茶店に誘つた。あたしもそつだが、阿部さんもメールや電話で長話するのが面倒なのだろうと思つた。会つて話せるならそれはありがたいことだ。

「紅茶でもどうかな?」

「驕つてくれるなら、遠慮なくいただきたいですね」

了解。と阿部さんは店員を呼んでさつさと注文を済ませた。席について上着を脱ぐと、椅子の背もたれにかけた。こういう時、男の人の視線を気にするようになったのは、昔つきあつてた人にその仕草が色っぽいと言われたからだ。今もちょっと意識してしまつたが、阿部さんがあからさまにあたしの方を見ずに何か注文しようかな?といった感じで注文票を見ているので、へんに意識して恥ずかしくなつた。

「話なんですけどね、やっぱり気になるんですよ。あゆみさんってどういう人なんですか?」

阿部さんは顔を上げてあたしを見た。

「名前、聞いたんだ。あいつには返事してやつたの?」

「断つたつもりんですけど、多分伝わってないですね」

昨日の調子だと、逆につねぼれているかもしれない。阿部さんはため息をついた。

「あいつもシヨウモナイやつだよな。あゆみってさ、俺の幼なじみなんだよ。一とあゆみを引き会わせたのは俺でや、つきあえるようにしてやつたのも俺。どっちからつて事もなかつたよ。あゆみも、一もお互いに同じ時間の中で好きになつて、いつの間にか恋に発展してたんだと思うよ

。それは些細な変化で、誰も一人がつきあつてるなんて思つてなかつた。でも一の子供っぽくて、母親に甘えるような仕草にさ、あゆみは一を手放せなくなつていつたんだよ。でも、一はそうじやなかつた

阿部さんはお絞りで手を拭いた。

「一の家族のこと知つてる?」

その時に気付いたけど、あたしは一と家族の話なんてたまに軽く口にするくらいで、たいして話したことがなかつた。首を振ると、阿部さんはだらうつな、という顔をした。

店員がやってきてあたしに紅茶を、阿部さんにはカプチーノをおいた。そして阿部さんは話をはじめた。

「母親がいないつて前話したけどさ、家が結構厳しくて、母親が亡くなつた後すぐに一の父親は再婚して、新しい母親を連れてきたけどその人は一に冷たくて、だんだん家族から遠のいていったんだ。そんな時にさ、年上で母親のように優しい愛で一に接する女性が現れたら、恋をしてしまうのは当然のことだと思つよ。でも一はあくまで母親の愛を求めてるだけ。そうだと思うだり? あゆみは母親のように、深い愛でつなぎ止めておくことができる信じてるから、浮氣だつて簡単にしてしまう。離れていくのは、一なのかあゆみなのか、長年付き合いの長い俺も分からなくなるよ。でも分かるのは、一の持つてる愛とか恋とかいうものは、偽りのようなもの。歩みに対するものが、一番本物っぽいんだ。だから傷付く前に離れるべきだつて、話しただろ?」

そういう話をしていた。あたしはその話を聞いて、ショックで一瞬恋が冷めてしまいそうになつたけど、結局そんなことにならなかつた。それはどこかで同情していたのかもしれない。あたしと同じように死んでしまった人の面影を求めてしまうところ。

寂しいだけとはいえ、それは人を傷つけてしまう行為だ。あたしはそれを身を以て経験したんだな。

「そつか。そうなんだ。阿部さんのいいたいことは分かりましたよ。でも、あたしあゆみさんがどうしたいのか分からないな。あゆみさんは・・・あゆみさんもきっと、一に対して似たような感情を持つてるんじゃない? まるで子を持つ母親の気持ちになつていいるだけなんじや」

そう考えると、手放せなくなるだらうし、一の浮氣に対しても別れという結果を出さない心理も少しほ理解できる。それに対しての阿部さんの返事は、同感するものだった。どうやら同じ考えに行き着いてるらしい。

「あたし、亜由美さんに会つてみたいな」

思わず口にした。阿部さんは携帯をおもむろに取り出すと、あたしの方をちらりと見た。

「会つてみる？」ここからそんなに遠くなことこのままだナビ
あたしは満面の笑みを作ると、頭を下げた。

「是非、お願ひします」

阿部さんは口元を微笑ませた。

そういうた経緯を経て、あたしは今あゆみさんの働く店にやつてきた。たぶんもうすぐ彼女はお昼休憩になるはず。時間を計算してきたから間違いなかつた。店から出てきた女性は、見間違えることなく、あゆみさんだ。阿部さんの携帯に叩つてゐる姿よつも、もつと美しい。

「こんなちわ」

声をかけると、誰だつただろうと不思議そうに首を傾げた。

「あたし阿部さんとの知り合いなんですけど、これからお昼どうですか？」

いきなり知らない人間にお昼を誘われるなんて、不信に思つだろう。でも彼女はにっこり微笑むと、ぜひ、と言つた。阿部さんの知り合いだというのが、彼女の不信感を取り払つたのかもしれない。

彼女の花屋は小さくて、でもとっても可愛らしい雰囲気があつた。そこから少し離れた場所に、お昼を軽くとれるようなカフェがあつてそこに彼女はつれていつてくれた。

「阿部つて、尚のことよね？　あいつの知り合いつつとは、彼女なの？」

あゆみさんはレモンティーを飲みながらフワフワする笑顔を向け

てそういった。

「まさか。違います。つていうか、あたし阿部さんの知り合いでもあるんですけど、一の知り合いでもあるんです」

田の前のおゆみさんはレモンティーを机におく前に少しだけ止まつた。それからため息をつくように息を吐き出した。

「なるほどね。一の知り合いつてことは、また浮気でもしてるの?」「慣れっこ」。といった感じでおゆみさんは視線を落としたまま、あたしの顔を見ようとしたしなかつた。

「してないとは言じ切れないですけど、心の浮氣は、してないですよ。あたし、おゆみさんに聞きたいことがあるんです」

「一のことなどをどう思つてるか?」

あたしは聞こえていい言葉を先に言われて、何もいえず口をつぐんだ。

「もうでしょ? はあ。またね。彼ね、いつもそういうのよ。浮氣するじゃない、それであたしのこと知られるじゃない、そくなつたらあなたみたいに彼女たちはあたしにそう聞きにくるのよ。それでその時、どうやってあたしのとここまで来たのかつて聞いたらね、尚に聞いたつていつも言うの。あなた、あの一人に遊ばれてるわ。どの女もそうだった。あたしがその子たちを見てどう思つてるか分かる?」「同情以上に、かわいそうだと思うわ」

そこでようやくおゆみさんはあたしの顔を見た。その瞳には確かに同情してあげようかという、寂しげな瞳があつた。あたしは急に恥ずかしくなつて、顔をうつむかせたままお茶を飲んだ。

「もうやめるわ。あなたみたいに可愛いお嬢さんが、一に恋したために傷付けらるなんて見てられないものね。それに、もひひひざりしてるし」

言い方がまさにひひざりた。という感じ。

「迷惑でしたね。こんなところまで来ちゃって」

「まあ、正直そうね。あなたは私にそんなこと聞いて、どうするつもりだったの? 別れてくれって、言つてしまつだつた? それなら

望みはかなつたわね「

皮肉たっぷりにいわれてしまつた。でもあゆみさんはまだ笑つたままで、あたしに対して怒つている風に見えなかつた。

「・・・わたしは、どうして欲しいと思つたか分かりません。でも聞かなきやならないと思つてただけです。・・・たぶん、一の傍にいてあげてほしいと思つてたかもしぬない。一を見てたら分かるんです。あたしもそつだから」

彼女は形の整つた眉を動かした。

「分かるって？ どういうこと？ 一は母親に依存してるのよ？ そんな彼の気持ち、あなたは分かるの？」

「ええ。あたしも一みたいに父親に依存した恋愛しかできなかつたから」

あゆみさんはなるほど。とため息まじりに呟いた。

「私は、一を必要としていないわけじゃない。でも、一はあたしを必要としないの。それがどれだけ寂しいことか分かる？ あたし自身を見てほしいのに、彼が望むのは母としてのあたし。そんな恋愛、悲しい。だからあたしは離れてやるのよ。一から離れて、一に教えてやるの。あたししか傍にいらないんだつて。あたししか必要じゃないはずだつて。でも離れてしまつて、本当に必要としてるのはあたしだつて気付くわ。そして一は違う人に恋をしてる。そんなの苦しいじゃない。だからもうやめる」

ずっと寂しい思いをしてきた、あゆみさんは涙を堪えるように鼻をすすつた。でもあたしは納得してなかつた。そりや、あたしにも寂しい思いをした経験はあるし、させていたという事に気付いたけど、あゆみさんと同じように一だってあゆみさんを必要としてるはずだ。そんな二人が離れたままになつていていいはずがない。

あたしは紅茶を飲み干すと、あゆみさんを睨むように見た。

「あたし、一に言います。あゆみさんの所に行くようにいます。だから、話してやって下さー。きっとあなたの気持ちを分かつてくれると思つんです」

こんな美しい人を泣かせてはいけない。あゆみさんが何かをいう前に、あたしはお金を払つて店を出た。出る前に見た、困った顔をしたあゆみさんのこと、あたしは忘れないだろう。

昨日の情事を一が告白の答えだと勘違いしていたら、メールが来るだろうと思っていた。案の定、メールには今から家に来るらしい文章がうたれていた。

返事は打った。待っている、と期待させるような文を。でもあたしが気を許したのは、一にもう一度あゆみさんと話をしてもういう説得するためだ。

三十分程すると一がやつてきた。手には熱々のあんまんがあった。なんとなく食べたくなつたらしい。

部屋にあがらせて、ソファーに座るように促すとお茶を用意した。座っている間一は、新聞を見たりしながらくつろいでいた。すでにあたしの部屋になじんでしまっているように見える。このまま手放すのも惜しい。でも、そういうわけにはいかない。あたしは首を振るとお茶を出した。

「あんまん、久しぶりだな」

手に持つと既に冷えたあんまんは皮がパリパリしていた。

「でもおいしいよ。アユさん甘いの好きでしょ？」

まあ、嫌いじゃないかな。

「あたし一に大事な話があるんだ」

一の動きが止まって、あたしの顔を真剣なまなざしで見つめた。それから、何？と首を傾げた。そんな顔をするので、少し笑った後あたしは一の手を握った。

「今日、あゆみさんに会つてきた」

息をのむような緊張した音が伝わってきた。

「あゆみさんつて、素敵な人ね。美人だし、とっても優しそうな人だし大人つて感じがする。話したのよ。いろいろ、一のこともいっぱい聞いた。それで分かつちゃたんだよ。あんたは、亜由美さんのことが好きだよきっと。だから、会いにいってみて。そうすれば全

部、わかるよ」

唚然としてあたしの顔を見る一の手に、紙を無理矢理握らせた。そこにはあたしが書いたあゆみさんの店までの地図が載ってる。以前に居場所を知らないといつてたから、書いておいたのだ。一は△惑つように紙を見つめて開いた。でもすぐ「じゃあ」と握った。

「無理だよ。もう終わってるんだ」

「終わってない。あゆみさんと話したら分かるよ。寂しいなり、彼女のところに行くべきなのよ。明日、バイト休みだっけ？」

「休みじゃないけど・・・暁まで空いてる」

「じゃあ、十分よ。行ってきなさい。ね？」

納得いかない顔をしている。そりやそりや。心の中は今さうじ、ぐぢやぐぢやになつてゐるんだろう。でもそれは自業自得というやつだ。無意識にとは言え、いろんな女を傷つけて、今はあたしを巻き込んでる。そんなやつにはお仕置きが必要なんだ。

一は鞄を持つて玄関に向かいはじめた。せっかく入れたお茶には手を付けていない。

「とりあえず、帰つてから考える。アコちゃんにこんなこと言われるなんて思つてなかつたから、ちょっととびっくりした。じゃあ」

笑つて、手を振つた。自然な行為。でもこれが最後になるような気がして、あたしは笑顔を作れなかつた。扉が閉ると、あたしはなんだか離れていく止めなくて良かつたのかという、後悔をしていた。

それでもこれで良かつたといつ、達成感に似た気持ちが湧いてきたので、なんだか気分が良かつた。このままあゆみさんと上手くいけばいいのにな。本気の恋をしていたけど、一ひとつて幸せな気持ちになれる道を選んでほしい。

それから、一には会わない日々が続いた。メールもしなかつたし、電話もない。阿部さんと会つようなこともなくなつてしまつて、もう一度と会つことはないと思つた。それはきっと一があゆみさんと

上手くいったからだと思つ。それなら、あたしは一との出会いを思い出に変えて、次の恋でもしよう。なんて楽天的に考えていたころ、あたしは再び一に出会つてしまつのだ。

それは会わなくなつてからすでに一年が過ぎていた。
バレンタインデー。今まではこの時期に彼氏と別れていたあたしだつたけど、今年はその彼氏すらおらず寂しいバレンタインデーになるなあ、と思つていた。就職が決まってすぐに引っ越しした場所は、以前とは全く違う町。窓からはビルからの光が、あたしを祝福しているようでロマンチック。バレンタインデーに祝福される様なことは何もないんだけどね。

その夜に、玄関をたたく音が聞こえた。慌てて出ていくと、まずは大きなぬいぐるみを渡された。キャラ物のでっかいやつ。びっくりしながらも受け取ると、その後ろから一が顔を出した。まさかの登場に驚いたあたしは、何もいえず目を見開いたまま見つめていた。「ハッピーバレンタインデー。知つてる？ バレンタインデーって、外国では男の人が女人にチョコを渡すことがあるんだって」知つてる。つていうかそんな話を聞いてる場合じゃないよ。

「なんで、ここ知つてんの？」

髪の毛の色が明るくなつて、二つほどピアスの数が増えてる。それから髪は短くなつて、顔つきもかわつた。一年見てないだけで、こんなに変わつてしまつもんなんだ。

「アユさんの友達に聞いた。なつみさんだけ？ そこまで一緒にきたんだけど、帰っちゃつた」

笑つた顔は子供ぽい。あたしもつられて笑つた。

「あたしなんかの所に来てていいの？」

「うん」

「本当に、いいの？ 浮氣ならごめんだからね」

「わかつてる」

「ちゃんと分かつてるの？ ま、浮氣ならいつか分かるか」

「そういうこと。それにアユさんが手を離さないでいてくれれば、

大丈夫」

人任せかよ。あたしはにっこり笑って、大きなぬいぐるみを玄関に投げて、一に飛びついた。それから家に入れて、ドアを閉め、ゆっくり抱擁しあつた。

「あゆみさんは、別れっちゃつたんだ・・・よね？」

「うん。ちゃんとけじめつけて来た」

「なんであたしなんか選んだの？」

これはちょっと恥ずかしい台詞だな。あたしは一の肩口に鼻先を押し付けた。

「アユさんは、甘えたいとおもっけど、あゆみとは違つて弱いところを見せて俺に甘えようとするじゃん。だから、上手くいくと思つたんだ。お互いに求めあつことつて、それを理解しあうのつて難しいけど、恋人じゃなくともそれができたんだから、アユさんとな続けれられると思つた。だから、好きになつたんだ」

なるほど。あたしもそれに近いかな。

ゆつくりと一から体をはなすと顔を上げて緩んだ顔のまま笑つた。一人で小さく笑いあうと、額をぶつけあって、しばらくお互いの存在を感じていた。

「あ、そうだ。チョコレートケーキあるんだ。丁度いいし食べようよ

「うん」

部屋の中に招き入れる。

いつもした時間が好きだった。一緒にご飯を食べて、おいしそうに食べる姿とかを見るのが楽しい。また、そうやって一ひとつ合つていけるんだね。はつきりと言葉にはしなかつたけど、あたしは心の中で何度も、一に気持ちを伝えていた。

好きだよ。つてね。

❀（後書き）

本当はバレンタインマークまでに終わらせる一話完結の短編にしよう
と思っていましたが、力不足で話がどんどんふくれあがり、まとめ
ることができずこんなに長くなってしましました。しかも更新が遅
いので、損で下さっている方には迷惑をおかけしました。
最後まで読んで下さってありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3857a/>

年上の女と年下の男

2010年10月8日15時49分発行